

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 7 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520990

研究課題名(和文)ポストヴァナキュラー論構築の試み

研究課題名(英文)Toward Constructing a Theory of Postvernacularity

研究代表者

太田 好信(OTA, Yoshinobu)

九州大学・比較社会文化研究科(研究院)・教授

研究者番号：60203808

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀を通して、国民国家形成から脱植民地化までを牽引してきたのは、言語、文化、アイデンティティが一体化した「ヴァナキュラー論」である。だが、これに代わり、21世紀の現代社会における複雑な社会集団の現状を把握するため、言語、文化、アイデンティティ間にある新しい関係を想定する「ポストヴァナキュラー論」を提示した。

研究成果の概要(英文)：This project has begun with questioning the assumption that during the Twentieth century the controlling metaphor for establishing a nation-state had been a model based on vernacular language, the idea in which the relations among language, culture and identity had been coterminous. Although this metaphor still remains influential, this project has noted an emergence of phenomena, not analyzable in terms of a model of vernacular language mentioned above. The project has paid attention to three historically and culturally different locations where different peoples reside, fighting to maintain their identities: the Japanese immigrants in the state of Hawai'i in the United States, the Ryukyuan in Okinawa prefecture, and the Ainu, the indigenous people, in Hokkaido, Japan.

研究分野：文化人類学

キーワード：ポストヴァナキュラー論 アイデンティティ 言語復興 先住民性 脱植民地化

1. 研究開始当初の背景

本研究は、文化人類学において自明化してきた言語、文化、アイデンティティという三者間の有機的連関に基づく理論の有効性を吟味したかった。たとえば、フランツ・ボアズ(1974)からルース・ベネディクト(Benedict 1946)や80年代のクリフォード・ギアツ(Geertz 1973)まで、ある社会の成員が学習し、共有する認識体系を文化と呼ぶという発想を抱いていた。これを「ヴァナキュラー論」とすれば、それは脱植民地化にも大きな影響力を与えた。21世紀になり、ジェームズ・クリフォード(Clifford 2013)は、先住民運動とは脱植民地化が再創造された形態であると主張した。では、21世紀においても、ヴァナキュラー論はどこまで妥当な考えなのだろうか。もし、妥当ではないとすれば、このヴァナキュラー論に代わる言語、文化、アイデンティティの関係を新たに想定する必要があるが、どのような状況において、それは必要になるのだろうか。とくに、21世紀における先住民性に根差した社会運動は、日本においても盛んになりつつある。この新しい理論により、日本における先住民運動の現在を把握するだけでなく、より開かれた社会に向けて先住民運動をエンパワーする一助となれば、一つの社会貢献の道も開かれるかもしれないという希望のもと、本研究は構想された。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、言語、文化、アイデンティティが同心円上に構想するヴァナキュラー言語をモデルとして構築されてきた理論が、21世紀になり、多くの社会のあり方と齟齬をきたすようになってきた事実と照らし合わせ、その理論に代わる理論という意味で、ポストヴァナキュラー論を提唱することである。これまで、ヴァナキュラー論は脱植民地化の根拠として機能してきた。すなわち、民族解放とは、文化と言語を共有する人

びとが宗主国による支配から解放されることであった。いまだに、このヴァナキュラー論をモデルとした政治運動が完全に向うになったわけではないものの、すでにヴァナキュラー論がナショナリズムに過ぎず、社会の成員を抑圧する結果をもたらすという反省も多い。より緩やかな関係性に根差した、「開かれた社会」を構想するとき、ヴァナキュラー論は問題視される。

(2) 以上の状況を踏まえ、言語、文化、アイデンティティの関連が同心円ではなく、異なった結びつき方をモデル化するのが、(ヴァナキュラー論の後に来るという意味で)ポストヴァナキュラー論である。たとえば、言語が消滅するとき、アイデンティティは存在可能だろうか。文化が継承されず、断絶してしまった後、復興したとき、それは真正性を保持しているのか。再生産と創造とを矛盾として理解しない方法はあるのか、などの疑問に答えることができる理論の提示を目的としている。

3. 研究の方法

(1) 理論構築の基礎は、イディッシュ語研究者であるシャンドラー(Shandler 2006)の著作を出発とした。シャンドラーは、現在、ニューヨーク近郊に在住する東欧から移住したユダヤ人たちは、イディッシュ語を日常言語とせず、英語による生活を営んでいる。しかし、イディッシュ語は意思疎通の手段ではなく、メタ・レベルでの象徴機能を担っているという。挨拶は必ず、イディッシュ語で交わし、排他的にアイデンティティを構築する。シャンドラーの強調するメタ・レベルでの言語機能に着目するのが、ポストヴァナキュラーという概念である。本研究は、この考え方を移民社会だけではなく、先住民社会の現在を研究する際にも有効な概念として拡張することを目指している。

(2) 基礎となる資料は、シャンドラーの研究した東欧ユダヤ人社会から遠く離れた

移民社会（ハワイの日系人）、近代国家の拡張の結果その版図に吸収された国家（沖縄県）、長い間の同化政策の対象となった先住民社会（アイヌ民族）におけるフィールド調査、ならびにそれを補完する文献資料調査から導きだす。フィールド調査地を以上のように選定をした理由は、研究成果をいち早く日本社会に還元するためである。

4. 研究成果

(1) 現地調査から判明した成果は、次である。まず、ハワイ日系人社会では、日本語の日常的な利用は消滅して久しい。1920年代までは、砂糖耕地で働く日系人労働者の葬儀するためにハワイ準州に渡った僧侶などが中心となり日本語学校を経営されていた。偏見に起因する日本人学校閉鎖の動きと闘い、米国最高裁で勝訴したのもこの時期である。しかし、戦後は衰退の一步を辿る。そのような流れに反し、日系人もビジン英語での表現を選択する。つまり、日系人だけではなく、ローカルという意識が芽生えており、バンブーリッジ社の活動にあるビジン語の表現がハワイ文学の中で位置を確保しつつある。先住民のハワイ語ではなく、ビジン英語が表現として選択されてはいるものの、いまだにヴァナキュラー論に根差したアイデンティティの表明が文学活動に残されていた。ここでは、一見、古臭く見えるヴァナキュラー論的発想が、21世紀にも生き続けていることを確認した。

(2) 沖縄県下では、シマクトゥバの復興が盛んになっている。2006年に沖縄県が条例化したシマクトゥバ復興の日（毎年9月18日）が、その象徴である。しかし、沖縄県ではシマクトゥバの危機が唱えられているもの、特定の業種では生活と密接に結びついた言語として、いまだに機能していることも判明した。そのような業種が、漁業である。宮古、八重山地方へと漁をおこないながら移動して行った糸満系漁民たちは、それぞれの土地

のことばではなく、漁業を通して、糸満の言語を話してきている。このような、生業と密着した言語の継承がある一方で、多くの場所では、シマクトゥバは、新たに学び直す対象となっている。また、老人ホームなどで細々と生き続けるものとなった。このような状況下、若い世代のお笑い芸人の中には、老人との意思疎通をしたいという希望を抱いていたので、子供のころからシマクトゥバを学んでいた者もいる。たとえば、ジュン選手（本名・大城純さん）がいる。シマクトゥバは政治化してもいる。親川志奈子さん（「オキスタ101」）らは、言語復興に関与すると同時に、そもそもなぜシマクトゥバが衰退したのか、日本社会に対しても鋭い意見を発信している（親川 2013）。日本のようなリベラル民主主義社会では、もちろん、言語多様性は重要な価値観である。国内の多様な言語の保全や復興は賛同や支持を得やすいだろう。しかし、リベラル民主主義の価値観は、歴史を隠蔽する。親川さんらの活動は、歴史の回復を通して、日本社会への反省を迫る力をもつ。ポストヴァナキュラー論が、見落としてしまっていた盲点を指摘した意味では、私にとり、重要な調査結果である。

(3) 北海道でのアイヌ民族の現在。2008年、衆参両院において、アイヌ民族を先住民として政府に要請する全会一致の議決が行われてから、日本においても、アイヌ民族の認知度は高まった。また、認知度向上には、2020年、白老町に開館予定の国立博物館の存在も大きい。しかし、反対にアイヌ民族に対する反動の大きい。明治の開拓史時代以降、政府の同化政策、定住政策の結果、アイヌ民族の言語や文化は大きく変容した。もはや、ヴァナキュラー論は機能しない状況にあるといっている。アイヌの人びとにとりアイヌ語は日常言語ではない。また、アイヌの文化的実践は、博物館や書物で学び直す知識となった。言語や文化は、もはやアイデンティティの基

盤にはなり得ない。そのような状況を直視し、現在、アイヌとしてのアイデンティティを主張すれば、河野本道さんのように、それは「ニュー・アイヌ」、すなわち真正性を喪失した現在、新たに創造されたアイデンティティであり、民族としての伝統を継承する存在でないという見解もある(河野 1999)。しかし、アイヌ民族の現在を考察するとき言語と文化の継承を可能にする自然共同体の存在を前提としたヴァナキュラー論を想定することは非現実的である。ポストヴァナキュラー論に立脚すれば、アイヌの自然共同体(コタン)が崩壊した後、記憶や資料を頼りに文化を創造し、また言語を学習しなおすという行為が、21世紀における先住民が直面している課題であり、そのような状況を作りだした近代国家側の責任が問われることも指摘されてしかるべきである。

(4) ポストヴァナキュラー論は、文化人類学がこれまで前提としてきた自然共同体の崩壊が起きた後でも、そのような崩壊の責任を問うという反省を通してアイデンティティが形成される空間が生じている状況を把握するとき有意義な概念である。社会的差異を他者化して、所与として扱うのではなく、それを作り出した社会のパワーの変遷史の中でアイデンティティを考察するとき、ポストヴァナキュラー論は有効であることが確認できた。

< 引用文献 >

Benedict, Ruth

1946 The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture.
Boston: Houghton Mifflin and Co.

Boas, Franz

1974 A Franz Boas Reader: The Shaping of American Anthropology, 1883-1911. George Stocking, Jr., ed.
Chicago: The University of Chicago Press.

Clifford, James

2013 Returns: Becoming Indigenous in the Twenty-First Century.
Cambridge: Harvard University Press.

Geertz, Clifford

1973 The Interpretation of Cultures.
New York: Basic Books.

河野本道

1999 『「アイヌ」 その再認識 歴史人類学的考察』北海道出版企画センター。

親川志奈子

2013 「しまくとぅばという『文化遺伝子』」『世界』No. 850: 180-181.

Shandler, Jeffrey

2006 Adventures in Yiddishland: Postvernacular Language and Culture. Berkeley: University of California Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)
太田好信、「アイデンティティ論の歴史化」、『文化人類学』査読有、第 78 巻 2 号、2013、245-264

[学会発表](計 4 件)
太田好信、「チマルテナンゴ県のある町に住む一家の遍歴」日本ラテンアメリカ学会、2013 年 6 月 1 日~2 日、獨協大学(埼玉県草加市)

太田好信、「批判性を回復する」、日本文化人類学会第 47 回研究大会、2013 年 6 月 7 日~8 日、慶応大学(東京都)

Yoshinobu Ota, "Unruly Globalization:

Thinking Through the Formation of Bootleg Subjectivity in (In)Visible Tokyo." Presented as Part of the AAA/JASCA Joint Panel: Common Themes and Varied Approaches: Globalization, Migration and Popular Art

(organized by Monica Heller and Koizumi

Junji). IUAES, 2014 and JASCA 50th
Anniversary Conference, Makuhari, Chiba,
May 16, 2014

Yoshinobu Ota, Indigenous Presence in
Articulation: Cases from Guatemala, the
Ryukyus and Hokkaido, Japan Compared.
Presented as Part of the Panel:
“Indigenous Futures and Anthropological
Renewals.” (Organized and Chaired by
Yoshinobu Ota) IUAES, 2014 and JASCA
50th Anniversary Conference, Makuhari,
Chiba,
May 18, 2014

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

太田好信 (OTA, Yoshinobu)

九州大学大学院・比較社会文化研究院・教
授

研究者番号: 60203808

(2)研究分担者 なし
()

研究者番号：

(3)連携研究者 なし
()

研究者番号：